

不入斗 I 遺跡

—「5 県は久津部西地区調査委託その2」発掘調査報告—



1995.3

静岡県袋井市教育委員会

静岡県中遠農林事務所

不入斗 I 遺跡

—「5 県は久津部西地区調査委託その2」発掘調査報告—

1995.3

静岡県袋井市教育委員会

静岡県中遠農林事務所

例 言

1. 本書は平成5(1993)年12月17日より平成6年3月25日に、静岡県袋井市国本字938-1他で実施した不入斗(ふにゅうと)Ⅰ遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、静岡県中遠農林事務所長 梅原仁を委託者とし、袋井市長嶋田舜次を受託者として、袋井市教育委員会が発掘調査を実施した。
3. 発掘調査は、早川保子(袋井市教育委員会・臨時調査員)が調査を担当した。
4. 資料整理・報告書作成も早川が実施した。
5. 発掘調査に際して、中遠農林事務所の皆さんにはたいへんお世話になった。なお、担当は曾根理市氏・遠藤一修氏(整備課)である。ここに記して感謝したい。
6. 本書内の遺物実測番号と写真番号は共通する。
7. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会生涯学習課職員が行った。
8. 調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査経過	1
第3章 調査体制	2
第4章 調査方法	2
第5章 地理的環境・歴史的環境	4
第6章 遺跡の概要	6
第7章 まとめにかえて	17

挿 図 目 次

第1図	不入斗遺跡の位置図	3
第2図	発掘調査区的位置図	3
第3図	発掘調査区の全体図	5
第4図	南地区実測図	7
第5図	トレンチ実測図	8
第6図	北地区実測図	9
第7図	遺構実測図	10
第8図	出土遺物実測図(1)	13
第9図	出土遺物実測図(2)	14
第10図	出土遺物実測図(3)	15
第11図	出土遺物実測図(4)	16

写真目次

- 1 北区全景（東より）
- 2 北区全景（西より）
- 3 調査風景（北区）
- 4 調査風景（北区）
- 5 溝跡 SD 1（右）SD 2（左）全景（西より）
- 6 溝跡 SD 1 出土木製品
- 7 溝跡 SD 3（西より）
- 8 溝跡 SD 3 土層堆積状況
- 9 溝跡 SD 3 土層堆積状況
- 10 溝跡 SD 5（北より）
- 11 土壌 001（東より）
- 12 井戸状遺構 002（南より）
- 13 井戸状遺構 004（北より）
- 14 南区全景・土壌検出（東より）
- 15 空撮用 ラジコンヘリコプター
- 16 ヘリコプターを見上げる関係者
- 17 不入斗遺跡全景（南より）
- 18 不入斗遺跡全景（北区）
- 19 第1トレンチ全景（南より）
- 20 第2トレンチ全景（南より）
- 21 出土遺物(1)
- 22 出土遺物(2)

第1章 調査に至る経過

「不入斗」遺跡は、静岡県遺跡地図によると古墳時代を中心とする遺跡として登録されているが、この地域一帯での発掘調査の事例がないためその具体的な性格は不明であった。

今回、県営のほ場整備事業に伴い「不入斗」遺跡」周辺が対象地となったため平成4年10月30日より11月19日までの期間、袋井市教育委員会学芸員 白澤崇を担当者として国庫の補助金を得て当遺跡の試掘調査が行われた。詳細な結果は『平成4年度補助金関係発掘調査報告書』に譲るが、遺跡の範囲内に弥生時代～中世に至る複合的な散布地が確認され集落跡や水田跡が存在する可能性が高まってきた。そして関係者の協議の末、平成5年度はほ場整備対象地のうち道路部分について発掘調査をすることができた。調査に際して土地所有者の皆さん、久津部西上地改良区、中遠農林事務所整備課の皆さんのご理解・ご協力を得た。ここに記して感謝したい。

第2章 調査経過

平成5年12月17日～27日

発掘用具を搬入し現地作業を開始する。南区・中央区・北区の順序で重機による耕作土の除去を行い遺構の確認作業に入る。南区では土壌状の遺構が1ヶ所検出され、中央区の小さな微高地は近年畑にした盛り土と判明した。

平成6年1月6日～13日

北区の遺構確認をする。茶園改値による攪乱が大きく上層が一定せず遺構確認に手間どる。北区西端の耕作土の下から大量の礫が検出される。南区の遺構平面図と北区の遺構断面図の作成を並行して行なう。

1月17日～20日

北区の北側にある中川栄古氏所有の畑地に2ヶ所トレンチを設定す。耕作の為攪乱されてはいるが溝の検出をした。北区は溝と井戸状遺構の発掘作業を継続する。

1月21日

北区清掘後遺構の部分写真撮影。

1月24日～2月3日

ラジコンヘリコプターによる写真撮影。北区遺構平面図の実測後遺構の埋め戻しをする。

2月4日

発掘器材の撤去を行い現地作業を完了した。

第3章 調査体制

調査計画	静岡県中遠農林事務所
調査受託	袋井市
調査実施機関	袋井市教育委員会
教育長	浅井通男
教育次長	長沼宣男
生涯学習課長	兼子春治
文化財係長	吉岡伸夫
主査(学芸員)	永井義博
主任学芸員	松井一明
学芸員	白澤 崇 森井雅彦
調査員	早川保子(本調査担当者)
経理事務	村田博美
(現地調査参加者)	川島良一 鈴木定雄 諸井貞平 加藤友平 高橋邦夫 山本 修 山本喜久 加藤博司 三浦久雄 高橋四郎 高橋秋義 山崎莊一 寺田矩江 早川里美 鈴木久美子 永田のお江 木村かよ子
(資料整理参加者)	船越スミ子 大庭京子 山下悦子

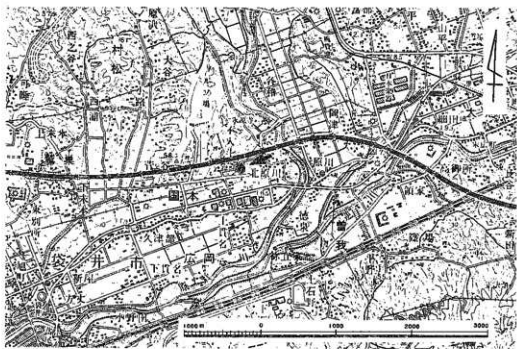
第4章 調査方法

今回の発掘調査は、園場整備用地内の道路建設部分のみの発掘である。事前の試験調査によって、農林部局には遺跡の破壊箇所を最小限に食い止める設計の変更を実施していただいた。その結果として、これだけの面積の対象地にもかかわらず、わずか500㎡のいわゆるトレンチ調査で済ませることができた。農林部局の文化財に対する深い理解と協力に感謝したい。

調査方法は道路敷設予定地について重機により耕作上(表土)を除去した後に作業員によって平面的な発掘調査を行い、土層についてもトレンチ内の壁面を調査して記録した。12月の湛水期ではあったが溝跡内や土壌内からは若干の湧水があり、排水ポンプを使用しながら調査した。出土遺物は遺構ごとに取り上げ重要なものは凶化・写真撮影してから取り上げた。

園場整備の時期と発掘調査終了の時期の関係もあって、発掘調査→測量→写真と丁程の円滑化を計った。また、ラジコンヘリコプターによる鳥瞰の写真撮影も行ない効率化を計った。

発掘調査における遺構・遺物の写真撮影は中型カメラ(アサヒペンタックス6×7)1台と、小型カメラ(Nikon F401)2台を使用した。現場で使用したモノクロフィルムはフジ写真フィルム株式会社のネオシンSSを、リヴァーサルフィルムも同じくフジ写真フィルム株式会社のフジクローム100 デイライトフィルムを使用した。



第1図 不入斗遺跡の位置図 (1/50,000)



第2図 発掘調査区の位置図 (1/5,000)

第5章 地理的・歴史的環境

不入斗Ⅰ遺跡はJR袋井駅より北東へ約5km、掛川市との市境に近い袋井市岡本地内に位置している。遺跡の東を流れる原野谷川は掛川市の八高山に源を発し各和原台地に沿って南流して小笠山丘陵にぶつかると流れを大きく西に変え、掛川市市域より西進してきた逆川、垂木川と合流して平野部に流れ込んでいる。

原野谷川の流域には数多くの遺跡や古墳が分布している。上流には中原遺跡、上の段遺跡など縄文時代中期の集落遺跡が点在し、中流の台地帯には吉岡大塚古墳、春林院古墳、行人塚古墳、瓢塚古墳、各利金塚古墳など5世紀から6世紀にかけての大型古墳が和田岡古墳群を形成している。続く可睡・油山丘陵の南端部には宇佐八幡宮境内古墳、石ノ形古墳そして権現山古墳、富士浅間宮古墳等5世紀末から6世紀にかけての古墳がある。このうち石ノ形古墳は、近年短甲・鏡、直刀等が出土し話題となった。

原野谷川、逆川、垂木川によって作られた自然堤防上には、まず弥生時代中期に左岸の原川遺跡に人々が住み始める。やがて人口の増加によって集落は近隣に広がって行き、弥生時代後期になると梅橋北遺跡、篠塚遺跡、曾我領家遺跡等でも生活が営まれるようになる。

原野谷川右岸の坂尻遺跡では古墳時代前期に集落が成立したことが近年行われた発掘調査により解明した。原野谷川流域では発掘される事の少ない古墳時代の集落跡であり、奈良・平安時代の官衙（佐野郡家）と推定される数々の資料も確認されて注目された。坂尻遺跡では長い間安定した集落が存続しているが、それは水難を避ける事のできる自然堤防上の住居と陸路、川を利用した南北の交通路の充実、河川がもたらす肥沃した土壌での農作物の恵み、浅い地下水による生活水の確保等の理由であろう。

不入斗Ⅰ遺跡は坂尻遺跡より北西へ600mの所にあり、北へ約1kmには坂尻遺跡との関連を問われる菅ヶ谷横穴群がある。坂尻遺跡の人口の増加によって集落が西へ拡大していった古墳時代後期にはこの辺りにも小さな集落があったと推察される。

「不入斗」の文字が古文書に見えるのは建武2年（1335）11月10日足利直義寄進状（静岡県資料第二輯）で遠江国富士浅間宮に不入斗（斗）の地を寄進するとある。この頃から不入斗の地は神領となる。天正の頃武田軍の兵火により、全焼した富士浅間宮は、天正18年（1590）地頭本間源三郎により社殿が再建されて現在では国指定の文化財に指定され、毎年1月3日には氏子男子によって田道祭が行われている。

永禄11年（1568）12月27日の古文書（内閣文庫）に、徳川家康が掛川城の攻撃を開始見付から兵を進め「不入斗」に陣をはるとある。富士浅間宮の神領として静かなこの地に武士達の機ただししい動きがあり荒くれた怒声の響いた日のあった事が、今は信じられない穏かな風景となつて広がっている。



第3図 発掘調査区の全体図

第6章 遺跡の概要

第1節 遺構

今回の調査は南・中央・北の3地区と2ヶ所のトレンチの調査を行なった。いずれの区画とも現状は微高地である。北区も微高地で茶畑となっていたが重機により田の耕作面まで下げて調査を行なった。南区は菜園に依る耕作で大きく攪乱されており、土壌状の遺構が1ヶ所のみで遺物は出土していない。中央区も現状は田の耕作面より80cm程盛り上した畑である。少量ではあるが江戸時代後期以降から明治時代までの陶器片が盛り土の中から確認され、これ以降盛り土して畑にしたものとする。今回検出された遺構の殆どは北区である。調査区が狭く遺跡の全容を掴むには至らなかったが東西に4本、南北に1本の溝と井戸状遺構が確認されている。北側のトレンチ内では溝状遺構が検出された。

1) 溝状遺構

SD1 幅約1m、深さ約0.52m、確認長約19m、溝断面は上部に広がるU字状の形態である。北区の西端から南側中央付近に斜めに横切る溝である。遺物は12世紀から16世紀のものが混在している。覆土最下層からは板状の木製品も出土している。

SD2 幅約1m、深さ約0.32m、確認長約10m、断面はU字状をなす東西方向の溝で、確認された長さの大半はSD1と重複している。遺物は主に16世紀から17紀である。

SD3 幅約2m、深さ約0.64m、確認長約17m、断面の立ち上がりは急で上部の広がったコの字状をしている。発掘区中央付近の北側から流路を東に変えて延びる溝である。溝の中央部には3本の杭が残っている。遺物の時期は15世紀後半から16世紀である。

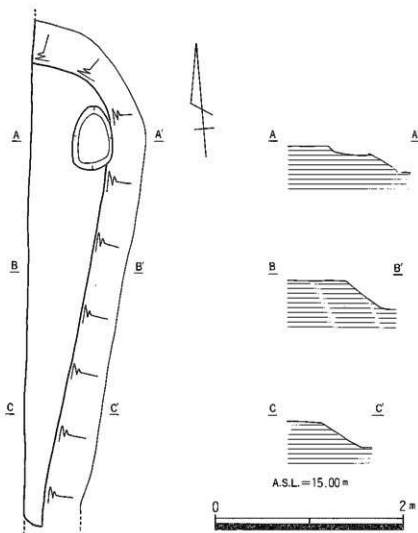
SD4 発掘区の北側中央から北端の限界に沿って東に伸び、東端で向きを南に変える溝である。北淵が発掘区外となり南淵はSD3と重複している為幅の計測は出来ない。深さは0.46m、確認長は約20.4m、断面は立ち上がりの急なU字状をしている。遺物は細片であり図化できないが、戦国時代と思われるかわらけと赤褐色の常滑産の陶器が出土している。

SD5 幅1.1~1.9m、深さ約0.38m、確認長3m、断面は上部のひろがったコの字状をしている。今回の発掘区内ではこの溝だけが南北を横断する。遺物は確認されていない。

2) 井戸状遺構

001 長径1.28m、短径1.2m、深さ0.53m 平面は円形をなし、比較的穏やかに広がりながら立ち上がり、底部は平らである。他のふたつの井戸(002・004)と比較すると浅く、南端が溝(SD1)に重なって排水も可能であり、洗い場の様な施設かも知れない。遺物は土師質の内湾型の脚付き鍋とかかわらけの細片が出土している

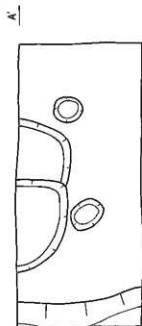
002 長径1.28m、短径計測不可、深さ1.1m、北端は調査区外で確認できないが平面は円形をなす。壁はほぼ垂直で、遺物は出土していない。今回の調査が終了し埋め戻すまで常時きれいな水が湧いていた。



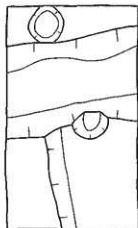
第4図 南地区実測図

004 遺構の南端は暗渠による攪乱、西端は調査区外の為、平面の全形確認は出来なかった。深さは1.13mあり東壁は2段に掘り込まれており井戸枠はなかった。井戸の中は礫で埋まり、遺物は6世紀から18世紀のものまでが混在していた。最下層の礫と共に木製品の火きり臼と曲げ物が出土しているが、これらの遺物はこの遺構が井戸として機能していた時期のものであろう。18世紀に該当すると思われる摺り鉢が遺構底部から出土しているので埋没時期は18世紀以降短期間に埋められた可能性がある。

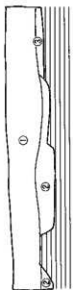
1トレンチ



2トレンチ

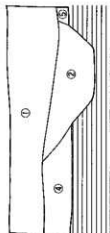


A'



A

B'

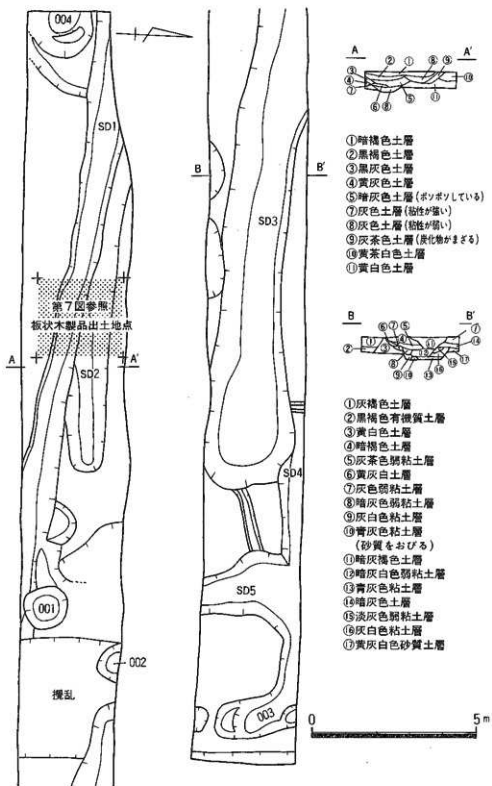


B

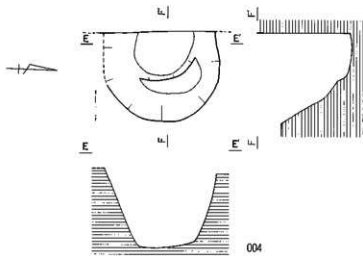
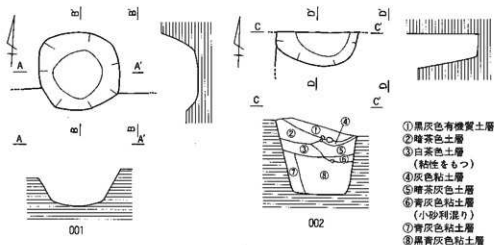
- ①暗褐色土層(耕作土)
- ②暗黄灰褐色土層
- ③明黄褐色土層(地山)
- ④暗黒褐色土層
- ⑤暗褐色土層(小砂利が多い)



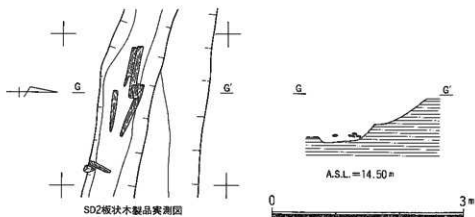
第5図 トレンチ実測図



第6図 北地区実測図



井戸跡実測図



第7図 遺構実測図

第2節 遺物

1) 古墳時代の遺物

第10図38・39は井戸状遺構004内の廃棄された隙の中にあった須恵器の器台脚部である。全体にはへら状工具の先端で少し斜め方向の上から下に、繊維の痕を残す沈線が施されており、横に3条の沈線と縦長の透かしの有ることがわかる。6世紀代丘陵南端に造られた古墳に関わりを持つ遺物であろう。

2) 平安時代の遺物

溝SD2からは灰釉陶器の口縁部(第8図17)が出土している。大須賀町清ヶ谷窯産のもので時期は10世紀に位置づけられる。

3) 中世以降の遺物

中国製磁器

(第8図5)は白磁の折り返し口縁部である。

湖西・瀬美産陶器

(第8図9～12・第9図30)は山茶碗底部で外面底部は糸切り離し後ナデ調整を施しており高台端部に筋痕はない。(第9図24)は小皿の底部で同じく糸切り離し後ナデ調整を施している。6点とも体部は打ち欠いた様な割れ方をしている。(第9図26)は山茶碗の口縁部で端部は軽く外反している。(第9図27)は高い高台を持つ鉢の底部で色は暗い灰色をしている。時期はいずれも12世紀に該当する。

瀬戸産陶器

(第8図6)は緑黄灰色をした15世紀古瀬戸の口縁部で、大きく外反した口縁は内側に段を作り比較的薄手である。(第9図21)は古瀬戸の小皿で色は緑灰色で底部には糸きり痕が残る。(第8図16)は高台の低い白志野の小皿で時期は16世紀とみる。(第9図32)の天目茶碗は鉄軸掛けで体部は丸みを帯びている。

志戸呂産陶器

(第8図15)は鉄軸掛けの天目茶碗であるが火を受けて緑灰色に変質しており、底部はさび粉を施してある。(第9図28・29)は鉄軸掛けの深鉢の底部である。

常滑産陶器

(第8図2・3)厚手で赤褐色をした16世紀の甕のN字口縁で、口縁部内側が磨耗している。(第8図4)は鉢の口縁部で色はぶい橙色をしている。

土師質土器

(第8図13・14)はロクロ成形の16世紀と17世紀のカワラケで、底部に糸切り痕が残る。(第9図20・31)は非ロクロ成形のカワラケで外面には指頭痕がみられる。鍋は(第8図18)の内湾型内耳鍋と(第9図25)の内湾型の脚付き鍋の2種類が出土している。(第9図33)は経筒と思われる土器である。外面はへらケズリを施し、内面は粘土紐の継目を指で荒々しく押しつ

ぶしている。

摺り鉢

(第8図7・8)は暗紫灰色をした底部で(7)には糸切り痕がみられる。(第8図19)は赤褐色の罌状の口縁部を持つ摺り鉢である。(第9図22・23)は暗赤褐色で胎土には長石が多い、口縁端部に面をとり(22)は内側に段を作る。(第9図34・35)は赤褐色で縁部を罌状に作っている。(第9図36・37)は紫灰色で(36)は折り返し状の口縁を持つ摺り鉢である。

土鍾

(第8図1)土師質で赤褐色をしている。端部が細くなる形をした土鍾で、長さは計測できないが直径は1.2cmを計り比較的小型である。表面は摩耗している。

木製品 (第10図)

火錐臼 (40・41) 建築部材転用の火錐臼でどの穴も焼け焦げた使用痕がみられる。

曲げ物 (43) 小型の杓で曲げた薄板を桜の皮で綴じている。

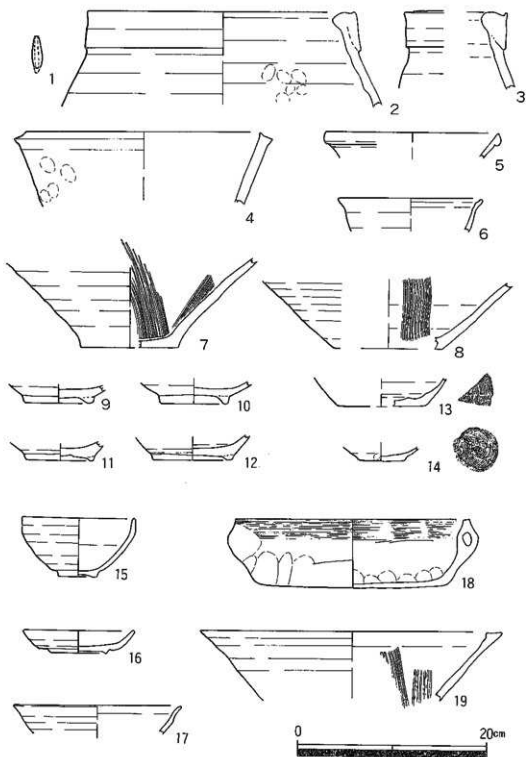
(44) 曲げ物の底板と思われるが木釘の痕は見られない。

(42・46) 同一の杓の柄と胴部と思われる。

(45) 底板状で桜の皮の縦じが残っている。

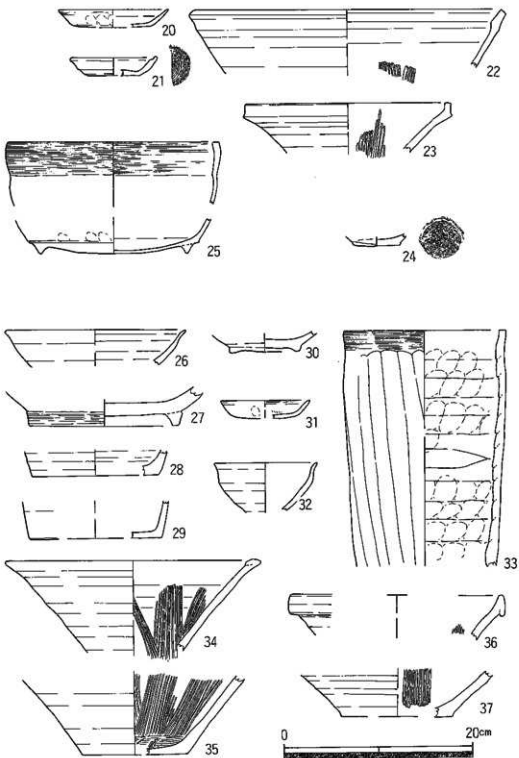
石臼

(第11図47) 茶臼の上臼である。直径17cm、高さ11.5cmで石質は凝灰岩で作られている。8分画で8本の溝が周縁まで達している。挽き木は横打ち込み式で挽き手口には菱型の模様があり宇治の抹茶臼の特徴を持っている。真二つに割れているが不用になった石臼は廃棄する時に「魂抜き」と言い、かなずち等で人為的に二つ割りにするという事からこの石臼も役目を終えて廃棄されたものであろう。(第11図48)は茶臼の下臼と思われる。中心が深く外側に向かって次第に浅くなる皿状をしている。石質は砂岩で底面には滑り止めの為かノミ痕がある。



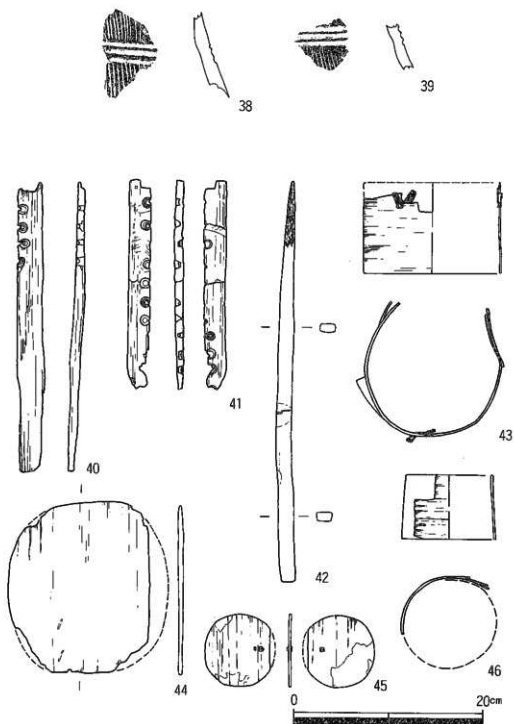
第8圖 出土遺物実測図(1)

1~14 SD I 15~19 SD 2



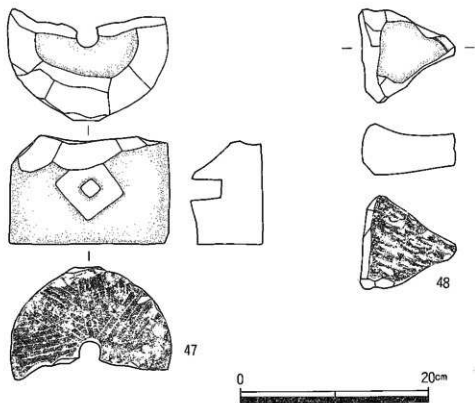
第9圖 出土遺物実測図(2)

20~23 SD 3 24 SD 4 25 0 0 1 26~37 0 0 4



第10図 出土遺物実測図(3)

38~39 古墳時代 40~46 木製品・曲物



第11圖 出土遺物実測図(4)

47 48 石臼

第7章 まとめにかえて

今回の発掘調査区は、県営ほ場整備事業中の道路分の調査であった。したがって調査区は幅が狭く、不入斗遺跡の全体の性格を掴むには資料不足であるが、確認された遺構と遺物を整理し成果をまとめてみたい。

1. 平成4年度に行なわれた試掘調査(白澤1993)では現在の不入斗部落の中心付近で弥生時代中期の遺物を確認し集落の出現時期の新しい資料を提供したが、今回行われた部落東端の調査では弥生時代の遺物・遺構は確認されていないので弥生時代の集落は東端部まで広がらないと思われる。
2. 古墳時代の須恵器の器台の破片が2点出土した。宇佐八幡宮境内古墳と同時期であるが、距離的に古墳の副葬品である可能性は少ないと思う。古墳時代の集落の板瓦遺跡でも器台の確認がされているところから、この辺り一帯に有力な古墳時代の集落があったと考えたい。
3. 12世紀の山茶碗の底部が北地区西端の004(井戸)を埋めた礎の中から検出されている。しかし出土地点は比較的上層であり他所にあったものが礎と共に運ばれて埋められたものであろう。同じ時期の遺構はないので山茶碗を使用するような施設が近くにあったものとする。
4. 今回の発掘調査では特に戦国時代の遺物が多かった。発掘区は地元の人々が「向かい屋敷」と呼んでいる所にあり、田を挟んだ東側に原川城跡である。城跡内には今も「的場」「堀先」「奥屋敷」等の小地名が残っている。今回L字型に土塁の残る土地に住居のある足立正文氏に話を伺う機会があった。その時に「子供の頃父親が昔は奥屋敷と向かい屋敷の間には3尺幅の石敷の小道がありそこを両家が行き来していたと言っていた。」という話を聞く事が出来た。現在は両屋敷の間には堀先と呼ばれる水はけの悪い溜田がありこの小道は残っていない。言い伝えられた話ではあるが両屋敷の関連を知る話として興味があった。足立氏の敷地内にある茶園では細片であるが戦国時代の土器片が多数採集できた。
5. 北区の発掘区内をほぼ並行に走る2本の溝(SD1・SD3)によって出来る中央の高まりと南北に横切る溝(SD5)は土塁とも土橋とも考えられるが、今回の調査では遺跡のヘリにある区画割りの溝と考えたい。

不入斗I遺跡内の発掘調査は前回の試掘調査と今回の調査の2回のみである。断片的な調査であり遺跡の全体を掴むまでにはまだ多くの時間を必要とすると思う。今後資料の増加によって不入斗I遺跡の姿が解明されていく事を期待したい。

報告書編集にあたり遺物の御教示を頂いた鈴木敏則氏(浜松市博物館)、そして発掘調査の際には地元の中川功吉氏とご家族の皆様方・宮城健一氏・加藤博司氏には大変お世話になった。文末ではありますがここに記して深く感謝の意を表します。(早川保子)

参 考 文 献

- | | |
|------------|------------------------------|
| 袋井市市役所 | 『袋井市史 通史編』 1983 |
| 袋井市市役所 | 『袋井市史 資料編 民族・文化財・年表』 1985 |
| 袋井市教育委員会 | 『坂尻遺跡 古墳時代編』 1985 |
| 袋井市教育委員会 | 『坂尻遺跡 平安時代・中世編』 1985 |
| 袋井市教育委員会 | 『袋井市原川城跡・坂尻遺跡』 1989 |
| 袋井市教育委員会 | 『原川城跡・坂尻遺跡』 1990 |
| 袋井市教育委員会 | 『平成4年度補助金関係発掘調査報告書』 1993 |
| 袋井市教育委員会 | 『久野城Ⅰ～Ⅳ』 1990～1993 |
| 三輪茂雄 | 『ものと人間の文化史「EⅠ」』 法政大学出版局 1991 |
| 佐々木高明・神崎宣武 | 『民具が語る日本文化』 河出書房新社 1989 |
| 山崎常磐 | 「掛川城攻防戦と原川大和守関係者の類末」 |
| | 『静岡県郷土研究』第16集 静岡県郷土研究会 1941 |

写 真 图 版



(1) 北区全景（東より）



(2) 北区全景（西より）



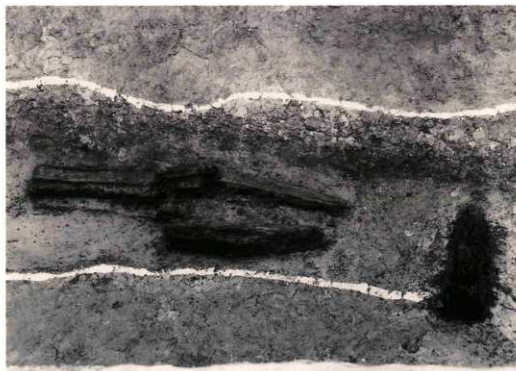
(3) 調査風景 (北区)



(4) 調査風景 (北区)



(5) 溝跡SD 1 (右)、SD 2 (左) 全景 (西より)



(6) 溝跡SD 1 出土木製品



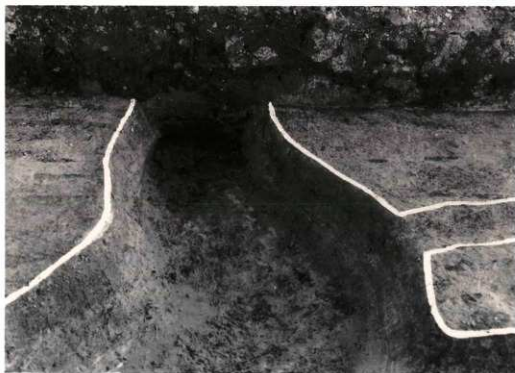
(7) 溝跡SD3 (西より)



(8) 溝跡SD3 土層堆積状況



(9) 溝跡SD3 土層堆積状況



(10) 溝跡SD5 (北より)



01 土坑001 (東より)



02 井戸状遺構002 (南より)



03 井戸状遺跡004（北から）



04 南区全景・土壌検出（東より）



05 空撮用ラジコンヘリコプター



06 ヘリコプターを見上げる関係者



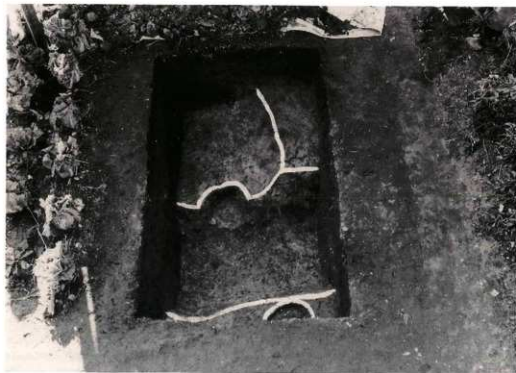
07 不入斗遺跡全景（南より）



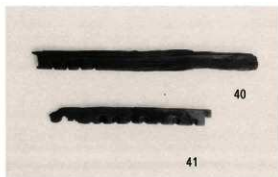
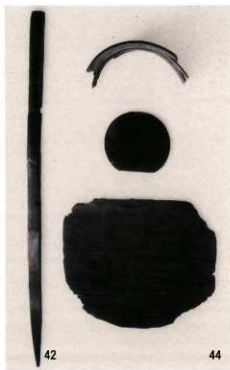
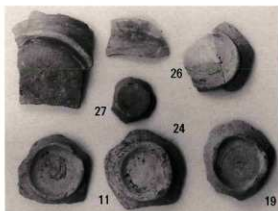
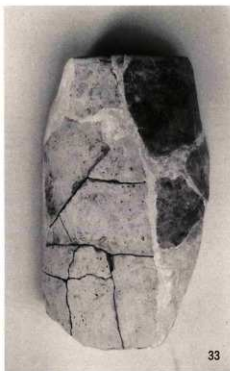
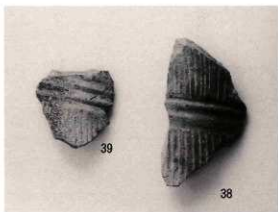
08 不入斗遺跡全景（北区）



09 第1トレンチ全景（南より）



00 第2トレンチ全景（南より）



② 出土遺物〈1〉



報告書抄録

ふりがな	ふにゅうといち いせき							
書名	不入斗Ⅰ遺跡							
副書名	県は久津郡西地区調査委託その2 発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	早川保子							
編集機関	袋井市教育委員会							
所在地	〒437 静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1 TEL 0538-43-2111							
発行年月日	1995年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 〇 〇 〇	東 〇 〇 〇	調査機関	調査面積 (㎡)	調査原因
不入斗Ⅰ	静岡県袋井市国本938-1					19931217 ↓ 19940325	500㎡	圃場整備事業に伴う道路建設部分
所収遺跡名	種別	主な遺構		主な遺構				
不入斗Ⅰ	館跡・屋敷跡	鎌倉時代から戦国時代・江戸時代	溝跡、井戸跡、	山茶碗、火きり臼、曲物、志戸呂焼、志野焼、その他陶磁器		中世前期から戦国時代・江戸時代前期の館跡の北東端に位置している。遺物の中心は16～17世紀代の陶磁器である。		

不入斗 I 遺跡

5 県ほ久津部西地区調査委託その2
発掘調査報告書

1995年3月20日

編集 静岡県袋井市新屋1-1-1
発行 袋井市教育委員会 ©
Ⅷ 0538-43-2111
印刷 浜松市中沢町1-1
株式会社 開明堂